

一般部門

夢の中の温泉

にしむら みほこ
【西村 美穂子・佐賀県】



7年前、父が末期の膵臓がんで入院した時のことです。

入院当初は父も元気で、よく看護助手の方に自分が吹いた尺八のテープを聞かせては、「Hさん上手。また聴かせてね」と褒められ、ご満悦の様子でした。

そんな父もだんだん身体が自由が利かなくなり、自分で寝返りを打てない不満を看病している私と母にぶつけるようになりました。そして、痛み止めのモルヒネで徐々に意識が混濁するように。

モルヒネで眠っている父のそばに私が1人で座っていると、よく父の尺八を聴いてくださった看護助手の女性が来られました。

それまで、母の前では泣けないと気が張っていたのに、その女性の前で思わず心のたがが外れてしまいました。

「こんなことなら、父に怒鳴られていた方が良かった。寝返りを打たせてあげたいけど、これじゃお父さんの意思が分からない。何かしてあげたいのに、私は父に何にもしてあげられない」とボロボロ泣いてしまいました。

その女性は「そういうふう泣いてくれる娘さんがいるだけで、お父さんは幸せなはずよ」と一緒に泣きながら優しい言葉を掛けてくださいました。そして、「そうだ!」と熱いお湯が入った洗面器を持ってこられ、タオルをお湯に浸して絞り、父の足を熱いタオルで包まれました。「こうしていると、寝ている人は温泉に入っているような気分になるの。お父さんもきっと気持ちいいって思っているはずよ。一緒にやりましょう」と2人で片足ずつ熱いタオルで包みました。

私は「やっと、してあげられることが見付かった」と救われたような気がしました。

父が亡くなる前日まで、タオル温泉は続けました。「お父さん、夢の中でいっぱい気持ち良くなってね」と願いながら。